

講演 2

宗教的实践と思想の変化、および聖なるものに関する学術的理解の変化：理論と方法

ファビオ・ランベッリ カリフォルニア大学サンタバーバラ校教授

はじめに

宗像・沖ノ島の宗教的遺産は、単なる地域的・国家的伝統を超えた存在である。それは、日本が古くから持つ、外部からの文化的要素を吸収し、変容させ、創造的に統合する能力を反映している。昨年の講演で述べたように、この世界遺産の真の価値は「海と国際交流への開放性」にある¹。この開放性は、日本の文化が創生期から形成してきた創造的適応力を象徴している。しかし逆説的に、こうした柔軟性は一定の継続性を示唆する。あらゆるものが絶えず変化するならば、おそらく本質的な何かは不変のままである。本稿の目的は、この動的な緊張関係—宗教的实践や思想が時間とともに如何に変化し、神聖を理解する学術的方法がそうした変化と如何に関わりながら発展してきたか—を検証することにある。

1. 「世界宗教」の概念

「世界宗教」という現代的概念は、19世紀後半に西洋の学者、宣教師、民族学者らが信仰体系に「-ism」という接尾辞を付けて呼称し始めたことに端を発する。例えば仏教（Buddhism）、ヒンドゥー教（Hinduism）、ユダヤ教（Judaism）、神道（Shintoism）などである。この分類は「宗教」を、超越的な神を

中心に据え、個人の救済または破滅に焦点を当て、経典に体系化された教義と道徳的教えの体系として確立した。ブレント・ノンブリー（2013）が『宗教以前：近代概念の歴史』で示したように、この宗教理解はプロテスタント以後の構築物であり、世界の他の地域ではほとんど前例がない²。

それ以前、人々は「宗教」ではなく、その慣習や儀礼的实践によって分類されていた。例えば17世紀のオランダ法学者フーゴ・グロティウスは、人類をキリスト教徒、ユダヤ教徒、マホメタン（ムスリム）、異教徒の四類型に分類した³。日本の学者・新井白石はイエズス会士ジョヴァンニ・バッティスタ・シドッティとの対話において同様の区別を採用し、「三つの主要な教法（*kyōhō*）：キリスト教徒、異教徒、ムスリム」と記述した⁴。こうした分類は世界的に流通し、信仰と文明に関する近世の思想交流を反映していた。

この文脈において「異教」は、古代エジプトに起源を持ちギリシャ、ローマ、アフリカ、インド、東アジア、アメリカ大陸へと広がった世界最古の根源的宗教と理解された。一部の著者は異教をキリスト教に取って代わられた退廃的教義と捉え、他者は深い精神的真理を体現するものと見なした⁵。こうしてヨーロッパ前近代思想は事実上、人類をキリスト教徒と異教徒の二陣営のみに分割したのである。（ユダヤ

¹ ファビオ・ランベリ 2024「海、島々、神々、仏：日本の宗教と国際交流の影響」『海域のネットワーク：交流と祭祀・信仰の変化—報告書』所収、「神宿る島」宗像・沖ノ島と関連遺産群保存活用協議会編、42頁。Fabio Rambelli, “Sea, Islands, Kami, and Buddhas: Japanese Religions and the Impact of International Exchanges”, in Preservation and Utilization Council of “Sacred Island of Okinoshima and Associated Sites in the Munakata Region, ed., Maritime Networks: Exchange and Changes in Rituals and Beliefs, p. 44. Fukuoka: Preservation and Utilization Council of “Sacred Island of Okinoshima and Associated Sites in the Munakata Region.

² ブレン・ノンブリー『宗教以前：近代概念の歴史』ニューヘブン・ロンドン：イエール大学出版社、2013年。

³ ブレント・ノンブリー『宗教以前』108頁に引用。

⁴ 新井白石「西廬遺言」『新井白石全集』第4巻 834頁、同「西洋奇聞」『日本思想大系』第35巻 42-43頁。

⁵ このテーマについては、パルタ・ミッター『悪名高き怪物たち：インド美術に対するヨーロッパの反応史』27-29頁参照。彌永信美『幻想の東洋：オリエンタリズムの系譜』37-48頁、87-105頁参照。

教徒とイスラム教徒はどちらのカテゴリーにも含めることができた。無神論者は異教徒に分類された。)

2. 超越主義と内在主義

イタリアの哲学者ジャンバッティスタ・ヴィーコ(1744年)は、この区分を理解するための生産的な枠組みを提供した。彼は三つの歴史的時代を記述した:全ての制度と活動が神聖視された「神々の時代」、人間が依然として神聖な媒介を通じてあるいは神と共に活動した「英雄の時代」、そして人々が遠く離れた超越的な神のもとで自らの運命に完全な責任を負えると考えた「人間の時代」。この進展は、神性が世界に浸透する内在的世界観から、神が自然から切り離された超越的世界観への西洋の移行を要約している。

現代の宗教研究は概して超越主義を優先してきた:単一の、遠隔の、道徳的な神を中心とする宗教である。しかし人類学者マーシャル・サリンズが『*The New Science of the Enchanted Universe* (魅せられる宇宙の新しい学)』(2022年)で論じるように⁶、人類の大半は内在主義的現実秩序のもとで生きてきた。超越主義的体系では「神は超越的実在に留まり、地上のことは人間に委ねる」のに対し、内在主義的体系では「神々と無数の超人的存在があらゆる人間活動に内在する」⁷。

アラン・ストラサーンはさらに、内在主義的思考においては「あらゆる価値ある目的を達成する能力は、超自然的力やメタ人格の承認または介入に依存する」と説明する⁸。こうして物質と精神の境界は崩壊し、あらゆるものは内在する精霊や「メタ人格」によって生気を与えられる。

サーリンズはアニミズムを、物理的実体(有生物・無生物を問わず)の中に、意図性・意志・伝達能力を備えた主観性が宿るとの認識と定義する⁹。守護霊・祖先・トーテム像・神々などがこれに該当する。

こうした存在群は抽象的な教義ではなく、大多数の社会における宗教生活の基本的枠組みを構成している。

3. 日本と内在主義の持続

日本は、遍在するアニミズム的あるいは内在主義的一秩序を保持してきた先進国として際立っている。沖ノ島と宗像の宗教文化はこれを鮮明に示している。これらの伝統は「神道」や「仏教」といった近代のカテゴリーを超越している。

明治維新後に形成された現代神道は、内在主義的要素(人間と交流する神々や祖先)と、天照大神や天皇を中心とした超越主義的要素を融合させている。しかし歴史的に、宗像の神聖文化は、航海・交易・自然力と結びついた多様な超人間的存在が住む世界を反映している。沖ノ島の供物や儀式は、おそらくこれらの存在との相互関係を維持する手段であった。

内在主義的秩序は静的ではなく動的である。神々は現れ消え、機能は移り変わり、表現は社会変化と共に進化する。日本では仏教の台頭が地域の宗教実践を根本的に再構築し、最終的に日本の内在主義を包括する枠組みとなった。しかし仏教自体も、阿弥陀の浄土への信仰のような超越主義的傾向を含む一方で、菩薩や地神、精霊といった神々の体系を通じて内在的要素も保持していた。

4. 宗像における歴史的変遷

宗像地域は、地域固有の内在主義と外部宗教体系の相互作用を明瞭に示す事例である。宗像神社の神宮寺として機能する仏教寺院・鎮国寺は、13世紀になってようやく建立された。これは他地域の類似機関よりはるかに遅い時期である。これは仏教との融合後も神信仰が地域で優位であった可能性を示唆し

⁶ マーシャル・サーリンズ『魅惑された宇宙の新たな科学:人類の大半の人類学』プリンストン・オックスフォード:プリンストン大学出版局、2022年。

⁷ マーシャル・サーリンズ『魅惑された宇宙の新たな科学』106頁。

⁸ アラン・ストラサーン『地外的な力:世界史における宗教的・政治的変容』pp.36-37。

⁹ マーシャル・サーリンズ『魅惑された宇宙の新たな科学』pp.85-113 随所。

ており、日本の宗教史における逆潮流としてさらなる研究が求められる。

平安時代には沖ノ島への供物供えが次第に衰退したが、これは海路の変化と仏教思想の影響による供物慣行の変化が原因と考えられる。仏教では航海を海神や竜王（りゅうおう）の領域への危険な侵入と見なす傾向があった。古代インドの文献には既に、船乗りが貨物を海に投げて海神を鎮める慣習が記されており、この思想はアジア全域に広がり日本にも到達した。時を経て、海上での供物は出航前に沿岸の寺院や神社で行う儀式に取って代わられた。

こうした変遷は、地域伝統が国際交流によって消去されるのではなく再構築された実例である。島自体は聖域としての地位を保ちつつも、入島には複雑な禊儀を要するようになった。沖ノ島の神聖性はこうして「秘仏」―秘された仏像―に類似した形態へと進化し、その不可侵性が神聖性を増幅させた¹⁰。同様に島は「結界」―日常的な人間の存在から隔離された空間―として扱われた可能性がある。

こうした変化は内在主義的世界観を廃絶せず、むしろそれを拡張し、宗像の精神的景観をより複雑なものにした。江戸期に仏教の影響力が衰退した後も、この地域のアニミズムの気風は、神道や儒教の枠組み内での様々な再解釈を通じて持続したのである。

5. 近代性と神聖性の再構成

近代において、技術的進歩と科学的合理主義は、人類が超人的存在に依存する度合いを弱めた。しかし日本では、超越性が内在性を置き換えることはなかった。代わりに、アニミズムの新たな次元が現れた―特に大衆文化において顕著であり、精霊、神々、そして知覚を持つ風景が中心的な役割を果たし続けている。

しかし潜在的な危険が存在する。豊かな内在主義的秩序が、国民国家を中心とした超越主義的体系に置き換えられる危険である。こうした文脈では、宗

教は政治イデオロギーに従属し、内在的伝統は抑圧されるか歪められる。これは 19 世紀末から 20 世紀初頭にかけて国家神道が形成された際に生じた現象であり、神聖な権力が天皇制に集中し、地域的な実践から部分的に切り離された。

6. 結論

日本の宗教性研究は、西洋発の宗教研究カテゴリーが持つ限界を明らかにする。近代ヨーロッパ思想によって形成された「宗教」という概念は、流動的で身体化され、関係性を帯びた日本の聖なる実践の本質を捉えきれないことが多い。

日本の宗教史―特に沖ノ島と宗像の事例―を理解するには、「世界宗教」という本質的に超越主義的な枠組みを超え、地域の内在主義的伝統を生きているシステムとして探求しなければならない。これは、民族主義的な民俗学研究における「日本の原初的な精神」の探求を意味するものでも、これらの伝統を後進的な過去の遺物として退けるものでもない。むしろ、創造性や回復力、そして世界的な文化交流の流れへの参加の表現として認識することである。

宗像の内在主義的秩序は、変容を通じてこそ宗教的生活が活力を保ち得ることを示している。この動的性質を認めることで、地域の実践と越境的潮流の複雑な相互作用をより深く理解し、究極的には「宗教」そのものの意味を再考できるのである。

参考文献

新井白石「西廬遺言」『新井白石全集』第4巻所収。

東京：国書刊行会、1977年。

新井白石「西洋奇聞」『日本思想大系』第35巻所収。

東京：岩波書店、1975年。

アラン・ストラサーン 2019『地外的な力：世界史における宗教的・政治的変容』ケンブリッジ：ケンブリッジ大学出版局

¹⁰ 秘仏（「秘密の仏像」または「隠された仏像」）については、ファビオ・ランベリ「秘仏：仏教表現の限界」『Monumenta Nipponica』57巻3号、2002年、271–307頁参照。

パルタ・ミッター 1977 『悪名高き怪物たち：インド美術に対するヨーロッパの反応史』 シカゴ：シカゴ大学出版局。

ファビオ・ランベッリ 2002 「秘仏：仏教表現の限界」、
『Monumenta Nipponica』57巻3号、271–307頁。

ファビオ・ランベッリ 2024 「海、島々、神々、そして仏像：日本の宗教と国際交流の影響」、『海域のネットワーク：交流と祭祀・信仰の変化—報告書』、44頁。福岡：「神宿る島」宗像・沖ノ島と関連遺産群保存活用協議会編

ブレン・ノンブリー 2013 『宗教以前：近代概念の歴史』 ニューヘブン・ロンドン：イエール大学出版局

マーシャル・サーリンズ 2022 『魅惑された宇宙の新たな科学：人類の大半の人類学』 プリンストン・オックスフォード：プリンストン大学出版局

彌永信美 1996 『幻想の東洋：オリエンタリズムの系譜』 東京：青土社

Lecture 2

Changes in Religious Practices and Ideas and in Academic Understanding of the Sacred: Theories and Methods

Fabio Rambelli Professor, University of California, Santa Barbara

Introduction

The religious heritage of Munakata and Okinoshima represents more than a local or national tradition—it reflects Japan’s long-standing capacity to absorb, transform, and creatively integrate external cultural elements. As I stated in my lecture last year, the true value of this World Heritage site lies in its “openness to the sea and to international exchanges.”¹ This openness symbolizes a creative adaptability that has shaped Japanese culture from its beginnings. Yet, paradoxically, such flexibility suggests a certain continuity: if everything constantly changes, perhaps something essential remains unaltered. My objective here is to examine this dynamic tension—how religious practices and ideas change over time, and how academic methods for understanding the sacred have evolved in relation to such changes.

1. The Concept of “World Religions”

The modern concept of “world religions” emerged in the late nineteenth century when Western scholars, missionaries, and ethnologists began labeling belief systems with the suffix “-ism”—for example, Buddhism, Hinduism, Judaism, and Shintoism. This classification established “religion” as a system of doctrines and moral

teachings codified in texts, centered on a transcendent deity, and focused on individual salvation or damnation. As Brent Nongbri (2013) has shown in *Before Religion: A History of a Modern Concept*, this understanding of religion is a post-Protestant construction, with few precedents elsewhere in the world.²

Before this, people were classified not by their “religions” but by their customs and ritual practices. The seventeenth-century Dutch jurist Hugo Grotius, for instance, categorized humanity into four types—Christians, Jews, Mahometans (Muslims), and Pagans.³ Japanese scholar Arai Hakuseki, in dialogue with Jesuit Giovanni Battista Sidotti, adopted similar distinctions, describing “three main teachings-laws (*kyōhō*): Christians, Heathens, and Mahometans.”⁴ Such categories circulated globally, reflecting an early modern exchange of ideas about belief and civilization.

In this context, “paganism” was understood as the world’s first and primordial religion, originating in ancient Egypt and spreading to Greece, Rome, Africa, India, East Asia, and the Americas. Some authors saw paganism as a degenerate doctrine replaced by Christianity; others viewed it as embodying profound spiritual truths.⁵ Thus, European pre-modern thought de-facto divided humanity into only two camps: Christians and Pagans. (Jews and Muslims could be included in either category; atheists were included among the Pagans.)

¹ ファビオ ランベッリ「海、島々、神々、仏—日本の宗教と国際交流の影響」「神宿る島」宗像・沖ノ島と関連遺産群保存活用協議会 ed., 『「海域のネットワーク-交流と祭祀・信仰の変化- 報告書」報告書』所収、42頁。福岡：「神宿る島」宗像・沖ノ島と関連遺産群保存活用協議会、2025年。Fabio Rambelli, “Sea, Islands, Kami, and Buddhas: Japanese Religions and the Impact of International Exchanges”, in Preservation and Utilization Council of “Sacred Island of Okinoshima and Associated Sites in the Munakata Region, ed., *Maritime Networks: Exchange and Changes in Rituals and Beliefs*, p. 44. Fukuoka: Preservation and Utilization Council of “Sacred Island of Okinoshima and Associated Sites in the Munakata Region.

² Brent Nongbri. *Before Religion: A History of a Modern Concept*. New Haven and London: Yale University Press, 2013.

³ Quoted in Brent Nongbri. *Before Religion*, p. 108.

⁴ Arai Hakuseki, *Sairan igen*, p. 834; *Seiyō kibun*, pp. 42–43.

⁵ On this subject, see Partha Mitter, *Much Maligned Monsters: A History of European Reactions to Indian Art*, especially pp. 27–29. See also Iyanaga Nobumi, *Gensō no tōyō: Orientalizumu no keifu*, pp. 37–48, 87–105.

2. Transcendentalism and Immanentism

Italian philosopher Giambattista Vico (1744) offered a productive framework for understanding this division. He described three historical ages: the Age of Gods, when all institutions and activities were seen as divine; the Age of Heroes, when humans still acted through or along with divine agency; and the Age of Men, when people thought they could take full responsibility for their destinies under a distant, transcendent God. This progression encapsulates the Western move from an immanent worldview—where divinity permeates the world—to a transcendental one, where God is detached from nature.

Modern religious studies have typically prioritized transcendentalism: religions centered on a single, distant, moralistic deity. Yet, as anthropologist Marshall Sahlins argues in *The New Science of the Enchanted Universe* (2022),⁶ most of humanity has lived under an immanentist order of reality. In transcendentalist systems, “a god abides in a transcendent reality, leaving the earth to humans,” while in immanentist systems, “gods and countless metahuman agents are present in all human activities.”⁷

Alan Strathern further explains that in immanentist thought, “the capacity to achieve any worthwhile objective is dependent on the approval or intervention of supernatural forces or metapersons.”⁸ Thus, the boundary between the material and the spiritual collapses—everything is animated by indwelling spirits or “metapersons.”

Sahlins defines animism as the recognition that within physical entities—whether animate or inanimate—reside subjectivities endowed with intentionality, will, and communicative power.⁹ Such beings include guardian spirits, ancestors, totemic figures, and gods. These categories, rather than abstract doctrines, constitute the primary framework of religious life for most societies.

3. Japan and the Persistence of Immanentism

Japan stands out as a developed nation that has preserved a pervasive animist—or immanentist—order. The religious culture of Okinoshima and Munakata illustrates this vividly. These traditions transcend modern categories like “Shinto” or “Buddhism.”

Modern Shinto, formed after the Meiji Restoration, combines immanentist elements (gods and ancestors interacting with humans) with transcendentalist ones, centered on the divine figure of Amaterasu and the emperor. Yet, historically, the sacred culture of Munakata reflects a world populated by diverse metahuman beings associated with seafaring, trade, and natural forces. Offerings and rituals at Okinoshima were most likely ways to maintain reciprocal relations with these entities.

Immanentist orders are dynamic rather than static. Deities appear and disappear, functions shift, and representations evolve alongside social change. In Japan, the rise of Buddhism profoundly restructured local religious practices, ultimately becoming the overarching framework for Japanese immanentism. Buddhism itself, however, contained transcendentalist tendencies—such as faith in Amida’s Pure Land—but also preserved immanent elements through its pantheon of bodhisattvas, local deities, and spirits.

4. Historical Transformations in Munakata

The Munakata region provides a clear case of the interplay between local immanentism and external religious systems. The Buddhist temple Chinkokuji, serving as the *jingūji* of Munakata shrine, was not established until the thirteenth century, much later than similar institutions elsewhere. This may suggest the local preeminence of kami cults even

⁶ Marshall Sahlins, *The New Science of the Enchanted Universe: An Anthropology of Most of Humanity*. Princeton and Oxford: Princeton University Press, 2022.

⁷ Marshall Sahlins, *The New Science of the Enchanted Universe*, p. 106.

⁸ Alan Strathern, *Unearthly Powers: Religious and Political Change in World History*, pp. 36–37.

⁹ Marshall Sahlins, *The New Science of the Enchanted Universe*, p. 85–113 *passim*.

after amalgamation with Buddhism—a countertrend in Japan’s religious history deserving further study.

During the Heian period, offerings on Okinoshima gradually declined, likely due to shifts in maritime routes and changes in votive practice influenced by Buddhist thought. Buddhism often viewed seafaring as a dangerous intrusion into the realm of sea deities or dragon kings (*ryūō*). Texts from ancient India already mention sailors appeasing sea spirits by throwing cargo overboard—an idea that spread across Asia and reached Japan. Over time, maritime offerings were replaced by rituals conducted at coastal temples and shrines before departure.

These transformations illustrate how local traditions were reshaped, not erased, by global exchanges. The island itself retained its sacred status but became increasingly restricted, accessible only after elaborate purification rituals. Okinoshima’s sanctity thus evolved into something akin to *hibutsu*—hidden Buddhist icons—whose inaccessibility enhanced their sacred power.¹⁰ Similarly, the island may have been treated as a separate space (*kekai*), a space set apart from ordinary human presence.

Such shifts did not abolish the immanentist worldview; rather, they expanded it, making the spiritual landscape of Munakata more complex. Even after Buddhism’s decline in influence during the Edo period, the region’s animist ethos persisted through various reinterpretations within Shinto and Confucian frameworks.

5. Modernity and the Reconfiguration of the Sacred

In modern times, technological progress and scientific rationalism have weakened humanity’s dependence on metahuman beings. Yet in Japan, transcendence has never replaced immanence. Instead, new dimensions of animism have emerged—especially visible in popular culture, where spirits, deities, and sentient landscapes continue to play central roles.

There is, however, a potential danger: the substitution of a

rich immanentist order with a transcendentalist system centered on the nation-state. In such contexts, religion becomes subordinated to political ideology, and immanent traditions are either suppressed or distorted. This occurred during the formation of State Shinto in the late nineteenth and early twentieth centuries, when sacred power was centralized in the imperial institution and partly detached from local practices.

6. Conclusion

The study of Japanese religiosity reveals the limitations of certain Western-born categories in religious studies. The concept of “religion,” shaped by modern European thought, often fails to capture the fluid, embodied, and relational nature of Japanese sacred practice.

To understand Japan’s religious history—particularly that of Okinoshima and Munakata—we must move beyond the framework of “world religions,” intrinsically transcendentalist, and explore local immanentist traditions as living systems. This does not mean seeking an “original spirit of Japan,” as in nationalist folklore studies, nor dismissing these traditions as relics of a backward past. Instead, it means recognizing them as expressions of creativity, resilience, and participation in global flows of cultural exchange.

The immanentist order of Munakata demonstrates how religious life can remain vibrant precisely through transformation. By acknowledging this dynamism, we can better appreciate the complex interactions between local practices and transnational currents—and, ultimately, rethink what we mean by “religion” itself.

References

- Arai Hakuseki 新井白石. *Sairan igen* 采覧異言, in *Arai Hakuseki zenshū* 新井白石全集, vol. 4. Tokyo: Kokusho kankōkai 国書刊行会, 1977.
- Arai Hakuseki 新井白石. *Seiyō kibun* 西洋記聞, in

¹⁰ On *hibutsu* (“secret buddha images” or “hidden buddha images”), see Fabio Rambelli, “Secret Buddhas: The Limits of Buddhist Representation,” *Monumenta Nipponica* 57/3, 2002, pp. 271–307.

- Arai Hakuseki* 新井白石 (Nihon shisō taikēi 日本思想体系 vol. 35). Tokyo: Iwanami Shoten 岩波書店, 1975.
- Iyanaga Nobumi 彌永信美 . *Gensō no tōyō: Orientarizumu no keifu* 幻想の東洋：オリエンタリズムの系譜. Tokyo: Seidosha 青土社, 1996.
- Mitter, Partha. *Much Maligned Monsters: A History of European Reactions to Indian Art*. Chicago: University of Chicago Press, 1977.
- Nongbri, Brent. *Before Religion: A History of a Modern Concept*. New Haven and London: Yale University Press, 2013.
- Rambelli, Fabio. “Secret Buddhas: The Limits of Buddhist Representation, *Monumenta Nipponica* 57/3, 2002, pp. 271–307.
- Rambelli, Fabio. “Sea, Islands, Kami, and Buddhas: Japanese Religions and the Impact of International Exchanges”, in Preservation and Utilization Council of “Sacred Island of Okinoshima and Associated Sites in the Munakata Region, ed., *Maritime Networks: Exchange and Changes in Rituals and Beliefs*, p. 44. Fukuoka: Preservation and Utilization Council of “Sacred Island of Okinoshima and Associated Sites in the Munakata Region.
- Sahlins, Marshall. *The New Science of the Enchanted Universe: An Anthropology of Most of Humanity*. Princeton and Oxford: Princeton University Press, 2022.
- Strathern, Alan. *Unearthly Powers: Religious and Political Change in World History*. Cambridge: Cambridge University Press, 2019.

本誌のデータは、本遺産群のデジタル・アーカイブ
「MUNAKATA ARCHIVES」の「宗像研究文献」より
閲覧・ダウンロードできます。
<https://www.munakata-archives.asia/>

世界遺産「神宿る島」宗像・沖ノ島と関連遺産群
第二期特別研究事業 第二回国際検討会

信仰の歴史的変遷の世界的意義 報告書

令和 8 (2026) 年 3 月 31 日発行

発行：「神宿る島」宗像・沖ノ島と関連遺産群保存活用協議会
(事務局：福岡県人づくり・県民生活部文化振興課九州国立博物館・世界遺産室)
〒812-8577 福岡県福岡市博多区東公園 7 番 7 号

ISBN978-4-9913533-4-5